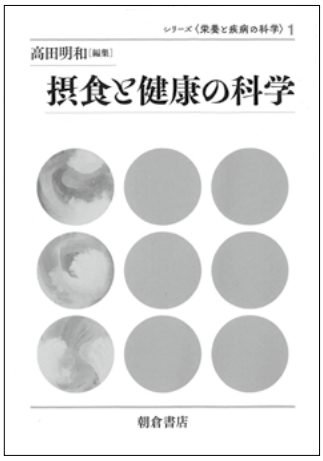

DATA

摂食と健康の科学

朝倉書店
高田明和編集

序章　肥満の予防と治療
第１章　味覚の受容
第２章　味覚情報の伝達と中枢処理
第３章　空腹感と満腹感
第４章　食と栄養・腸内細菌との共生
第５章　精神栄養学から見た食
第６章　ブドウ糖・ショ糖と脳機能
第７章　糖質と健康
第８章　摂食行動の調節
第９章　画像による摂食異常の解析と臨床応用

栄養と疾病の科学シリーズの初刊として「摂食と健康の科学」が出版された。本書は高田明和名誉教授の編集のもとに、生物が生存するために必要不可欠な摂食という行動について、代謝などの疾病発生機序からその予防に至る仕組み、味覚の役割やその情報の伝達、摂食行動に影響する代謝センサー、腸内フローラや栄養代謝、精神異常などの観点から詳しく論じられている素晴らしい書籍である。また、最後にはその摂食異常の画像解析や、それを用いた摂食行動の臨床研究まで議論を広げ、摂食という原始的な課題の解明に踏み込んでいる。

これらの本能ともいえる生物の神秘的な行動に、生理学や栄養学などのアプローチから説明を加えようとした大胆な試みが見え隠れしている。著者には、栄養学や代謝学のトップリーダーの研究者が名を連ね、摂食の科学をわかりやすく解説している。また、基礎的な味覚の受容を解説した樽野陽幸教授や画像解析の山田恵教授など、京都府立医科大学の研究者たちが名を連ねている。学長職を離れ、久々に生理学から臨床に至る一連の摂食の概要を目の当たりにし、彼らの新しい知見に目を見張っている。

肥満などの代謝異常の原因として、腸内細菌や受容体が重要な役割を演じていることが最近になるまでは明らかではなかった。分子生物学の進展によって、ようやく摂食という行動にも科学的なメスが入り、次々と新しい発見が相次いでいる。今後は疾病の原因究明や予防法の発見にこれらの知識が役立つものと思われる。

これから研究を始めようとする新進気鋭の若い研究者から、私のように新しい研究切り口を発見して喜びを感じる年老いた研究者まで、幅広い読者層に本書を推薦したい。本書の全容の把握のため、章立てを紹介して書評としたい。

（公財）ルイ・パストゥール医学研究センター理事長
京都府立医科大学 前学長
吉川 敏一